

令和5年度「心の輪を広げる体験作文」京都市入賞作品

最優秀賞

該当作品なし

優秀賞

「母」 浅田 理生（関西創価高等学校）

私の母は目に病気を患っている。病氣の名前は網膜色素変性症。この病氣が進行すると視野が狭くなっていき、最後には視野が奪われ失明する。さらに治療法はまだ確立されていない。私が生まれたときには母の視野はとても狭くなっていた。どのぐらいの視野なのかという、片手の人差し指と親指をくっつけてつくった円ぐらいの視野だ。今も母の視野はそのぐらいだ。だから私は物心がついたときから母がどこかに出かける際にはいつもつきそって母の目の代わりをしていた。母が町内の役員の会合があるときも、学校で懇談会があるときもいつも母の目となっていた。だから母の目となり母についていくのが私にとっての普通だった。

しかしそれがみんなにとっては普通のことではないと小学校4年生ぐらいの時に気づいた。なぜかという母が私の腕をつかみながらあるいているのを見かけると近くに住んでいる人たちから「えらいね」とほめられることが増えたからだ。もちろんほめられるのはうれしかったが私としてはなんでこんなにほめてくれるのだろうと思っていた。その時に私は母に目に病気を患っていること、視野がとても狭くなっていることを初めて聞いた。これまでも目の病氣で見えにくいことはしっていたが、視野がとても狭くなっていることを理解し視野障がいと聞いたときびっくりした。このことを聞くと私の疑問は晴れた。だからもっと母のお手伝いもしようと思った。

しかし私が中学校に入学すると部活に入部したり勉強をしたり、友だちと遊んだり私の生活が忙しくなると母につきそうことができなくなっていった。そこで私が感じたのは人々の優しさだ。母が母の友だちと遊ぶときにはその友だちが母につきそってくれたり、母が用事があったどこかに行くときにも勇気を出して声をかけてくれる人がいたりなどと人々の優しさを母を通して感じる事ができた。私は母につきそうことができなくなってしまう分、母が誰かに優しくしてもらった分困っている人がいたら声をかけてお手伝いをしようと思った。だが、私は元々明るい性格ではなく声をかけるときに勇気がでないこともたくさんあった。勇気をだして声をかけても遠慮されることもあった。そんなことが続いている中、私がい物にいくと白杖を持っている方に会った。その方は白杖について歩いていた。私はその方に声をかけようと思ったが勇気をだせずに少し迷ってしまった。しかし、母が困っているときに声をかけてもらっても嬉しいといっていたのを思いだして私は勇気をだして声をかけることができた。私はなんと言われるかがとても心配でどきどきしていた。声をかけると白杖を持っていた方は、笑顔でありがとうね、と言ってくれた。助けてくれた人がありがとうと言うのは普通のことかもしれないが私にはその言葉がとても嬉しかった。そし

てその方に声をかけることができ自分も成長できたと思う。その方と分かれるときに言ってくれた言葉がとも心に残っていて、今も私が勇気がでずじじじしてるときに勇気をくれる言葉だ。それは、「今日は本当にありがとうね、助かったよ。君は私が障がいをもっているから助けてくれたのかもしれない。もちろんそれも、とても大切なことだよ、ありがとうね。でもね、本当は障がいがある、ないに関係なく誰かが困っていたら助けることが私は大切だと思うんだよ。そういう人が増えたらもっとみんなも生きやすくなると思うんだよ。」という言葉だった。私はその言葉をきくまでは、障がいをもって人はかわいそうだから助けなくちゃいけないと思っていた。けれどもそれは間違いだった。本当は障がいがある方もない方も関係なく困っていたら助けるべきだと気づくことができた。

私の母は障がいをもっている。そんな母から人を助けることの大切さを学んだ。今は障がいをもつ人に心ないことを言う人もいてしまう。私はそんな人の心が嫌だ。なぜ同じ人なのに少し自分と違う特徴をもつからというだけで暴言を吐けるのだろうか。そんな人たちがいなくなると差別がない世の中になりたい。しかし今、私はただの高校生でしかない。私が何か発言したところで何も変わらないと思う。だから私は先生をめざしている。そこで私の経験を通して少しでも障がいをもつ方への差別や偏見を無くせればいいなと思う。私はこれからも私が理想とされるような素敵な先生になるために日々困っている人がいれば助けていきたいと思う。